喫煙の母子の健康に及ぼす影響

研究協力者　松山　栄吉（東京厚生年金病院産婦人科）
分担研究者　南部　春生（聖母会天使病院小児科）
吉田　　豊（日本医科大小児科）
清水　弘之（東北大学医学部公衆衛生）
中村　正和（大阪府門真保健所）
平山　宗宏（東京大学医学部母子保健）
小林　　臻（東京大学医学部母子保健）

Ⅰ．研究目的

近年疫学的及び実験的研究により、喫煙が人々の健康に悪影響を及ぼすことが明らかにされてきた。妊婦においても、本人の喫煙が低出生体重、流早産、周産期死亡、先天奇形など、妊娠分娩のリスクを高めることが明らかにされつつある。　一方、家庭や職場等において喫煙者の近くにいる非喫煙者の妊婦や小児が、いわゆる受動喫煙によって喫煙者と同じように健康被害を受ける可能性を示唆する報告も散見されるが、国内外を含めてまだ研究は少なく、断定的な結論を得るには至っていない。

今後禁煙や節煙の教育、指導も含めて、妊婦の喫煙や妊婦・小児の受動喫煙の分野の調査・研究を充実させ、喫煙や受動喫煙が母子の健康にどのように影響するかを明らかにすることは、わが国の母子健康対策を推進するうえで有用な基礎資料を提供するものと思われる。

今回は初年度の報告として、国内外の文献を中心に、研究協力者の研究の概略を紹介する。

Ⅱ．研究結果の概要

1．喫煙母子の健康に及ぼす影響に関する研究－文献的考察

松山、平山、吉田、清水、中村、小林は本課題に関するこれまでになされた国内外の調査研究について156の文献を収集し、6項目について文献的考察を行い以下の知見を得た。

①　女性の喫煙と性機能への影響

女性の喫煙と不妊の関係については、喫煙により妊よう性が低下し、不妊症

のリスクが高まることが認められている。喫煙と閉経の関係については、喫煙により閉経が1~2年早まることが示されている。

② 妊婦の喫煙の影響

妊婦の喫煙の有害性が近年の数多くの調査研究により明らかにされてきている。なかでも、妊婦の喫煙と低出生体重、早産、周産期死亡、妊娠合併症の関係については、因果関係を立証する際の判定基準（関連性の一貫性、強さ、量反応関係、特異性、時間的関係、生物学的妥当性など）がほぼ満たされており、そのメカニズムとしては、たばこ煙に含まれるニコチンと一酸化炭素が主要な役割を果たすと考えられている。妊娠中の喫煙による自然流産や先天奇形のリスクの増加は、これを示唆する報告もあるが、なお因果関係を立証するには至っていない。なお禁煙の効果としては、妊娠前にのみならず、妊娠後（妊娠初期）においても禁煙すれば、出生体重をはじめ妊娠・分娩のリスクが改善されることが認められている。

③ 妊婦への受動喫煙の影響

妊婦への受動喫煙の影響についての研究は未だ少ないが、低出生体重の原因となることが示唆されている。

④ 授乳婦の喫煙の影響

喫煙により母乳の産生が抑制されるかどうかは明らかではないが、ニコチンが人の乳汁中に分泌されることは確実である。乳汁を介しての微量のニコチンにより中毒症状を起こした事実は報告されているが、慢性毒性については不明である。⑤ 小児への受動喫煙の影響

母胎を介さず、小児自身がたばこの煙を受動的に吸った場合、肺機能は低下するようである。呼吸器疾患との関係についても肯定的な報告が多い。身体成長の抑制を疑う報告もある。

⑥ 青少年の喫煙の影響

青少年期になって、たばこを直接吸うことにより、肺機能低下、せき、たんなどの症状の増加という形で、明らかな呼吸器障害が認められている。さらにわが国では、成人後に喫煙を開始した者に比べ、未成年での開始者のがん・心臓病リスクが得にたかいとの報告がある。

2．女子学生の喫煙に関する行動と意識

小林、中川は都内及び近郊の4年制大学2校及び短期大学2校の女子学生（2年生）をそれぞれ560名ずつ計1120名について、質問用紙にて喫煙の状況につき調

査を行った。

習慣性喫煙があると回答した者は200名（17.9%）で、4年制大、短期大に差がなかった。1日の喫煙量では10本前後がもっとも多く、約80%を占め、100%は1箱を超えていた。喫煙開始の時期は、小学生の時3%、中学生30%、高校生40%、大学生になってから22%で、高校までに始めた者が78%であった。喫煙の動機は、なんとなく35%、女友達に勧められて18%，男友達に勧められて9%、好奇心から28%、むしゃくしゃして9%、その他1%であった。喫煙に対する意識は、体に悪いので早くやめたい34%、周囲がやめろというのでやめたい9%（計43%）、結婚するときにやめる10%、体に良くないが当分やめない35%、体に悪いと思わないのでやめない12%であった。喫煙の健康に及ぼす影響については、良く知っている12%、大体は知っている43%、あまり知らない40%、無回答5%であった。

3．妊娠を境とした喫煙行動の変化とその要因

清水、田山らは、仙台南保健所に妊娠届け出をした532名を対象に、喫煙についての調査を行った。得られた回答のうち418例を分析した。喫煙経験のない者321名（36.8%）、過去に喫煙したが届け出時に中止していた者79%（うち妊娠してから禁煙50名）、届け出時にも喫煙継続18名（4.3%）であった。対象妊婦の喫煙率は今回の妊娠前が16.3%（68名）、調査時が4.3%（18名）であり、妊娠前に喫煙していた者の73.5%が妊娠を知ってから禁煙した。喫煙継続群と喫煙中止群との間で、喫煙開始平均年齢と喫煙期間は、ともにそれぞれ20歳、7年と差がなかった。夫の喫煙率はそれぞれ88.9%，85.7%で有意差はなかった。妊娠前の喫煙本数は前者で有意に多かった。今回の妊娠が予定外と答えた者は、前者38.9%後者
10.0%と前者が有意に多かった。子供の数は前者に多く、つわりの程度は後者で強かった。

4．妊婦への受動喫煙の妊娠に及ぼす影響に関する研究

中村、日山らは大阪府門真市に妊娠届け出時に自記式アンケートに回答した妊婦1772人を調査対象として、受動喫煙の妊娠に及ぼす影響について前向き調査を行った。

対象のうち転帰が生産でかつ単胎の者1474人について、妊婦と夫の喫煙状況を調べた。両者非喫煙の群、妊婦は非喫煙で夫が喫煙の受動喫煙群、両者とも喫煙の群にわけて、喫煙の影響を検討した。低体重児の発生率の相対危険度は、

両者非喫煙群283例を1として両者喫煙群115例で1.4、受動喫煙群758例で1.2であった。早産の発生率の相対危険度は両者非喫煙群283例を1として、両者喫煙群116例で

2.2、受動喫煙群757例で0.9であった。

5．児童生徒の禁煙教育のためのパンフレット製作の試みとその効用について

南部は札幌市学校保健会の依頼を受け、児童生徒向けの禁煙パンフレットを作製し、配布運用した。パンフレットは「体をむしばむもの（タバコ、シンナー、アルコール）」と題し、教師用の手引書「人体に及ぼすタバコ、シンナー薬物」を添えて用意した。パンフレットは市内の中学1年生を対象に配布した。その内容は次のようである。

①タバコ病、②タバコと癌、③循環器障害、④消化器障害、⑤喫煙と頭の働き、⑥喫煙と運動、⑦女性とタバコ（母体と胎児への影響）、⑧喫煙者と家族、⑨禁煙の効果。

以上、「喫煙の母子の健康に及ぼす影響」に関しての本年度（初年度）の研究の各々について、結果の概要を述べた。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1.研究目的

近年疫学的及び実験的研究により、喫煙が人々の健康に悪影響を及ぼすことが明らかにされてきた。妊婦においても、本人の喫煙が低出生体重、流早産、周産期死亡、先天奇形など、妊娠分娩のリスクを高めることが明らかにされつつある。一方、家庭や職場等において喫煙者の近くにいる非喫煙者の妊婦や小児が、いわゆる受動喫煙によって喫煙者と同じように健康被害を受ける可能性を示唆する報告も散見されるが、国内外を含めてまだ研究は少なく、断定的な結論を得るには至っていない。

今後禁煙や節煙の教育、指導も含めて、妊婦の喫煙や妊婦・小児の受動喫煙の分野の調査・研究を充実させ、喫煙や受動喫煙が母子の健康にどのように影響するかを明らかにすることは、わが国の母子健康対策を推進するうえで有用な基礎資料を提供するものと思われる。

今回は初年度の報告として、国内外の文献を中心に、研究協力者の研究の概略を紹介する。